琉球大学学術リポジトリ

第2章共通教育等科目シラバス調査の結果報告：URGCC学習教育目標の設定状況

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学大学教育センター
	公開日: 2018-07-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 山田, 美都雄, Yamada, Mitsuo
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41247

第２章　共通教育等科目シラバス調査の結果報告

～URGCC 学習教育目標の設定状況～

山田美都雄（URGCC 推進支援室研究員）

１．調査の背景

平成 24 年度から本学に導入された「琉大グローバルシティズン・カリキュラム（URGCC）」において，シラバスはそれを駆動させるための重要なツールとして位置づけられている。このことは，導入前年度に制定された「URGCC 基本方針」において，「学士教育プログラムでは，シラバスの達成目標欄に，該当する学習教育目標（URGCC 学習教育目標または学士教育プログラムの学習教育目標）を明記する」とされていることからも理解されよう。今回，このように URGCC 実施の要として位置づく「シラバス」を対象に，URGCC のねらいがどれほど果たされているかを検証すべく，URGCC 推進支援室において現況調査を行った。本稿ではその調査結果を提示する。

今回のシラバス調査の主旨は，「共通教育等科目シラバスの達成目標欄に URGCC 学習教育目標が正しく記載されているか」を調査することにあった。本調査は，平成 24 年度より共通教育等科目の授業シラバスにおいて，表１に示すように各科目領域別に「原則として含めるべき目標」が設定されたことに端を発している。すなわち，平成 24 年度から共通教育等科目のシラバスにおいては，７つの URGCC 学習教育目標（自律性，社会性，地域・国際性，コミュニケーション・スキル，情報リテラシー，問題解決力，専門性）のうち，科目領域に応じて原則として含めなければならない目標が設定されたのである。たとえば人文系科目であれば，授業の達成目標に「社会性」を含めなければならない，とされた。この他に，「含めることを推奨する目標」，「含めることができる目標」も設定されているが，これらに該当する目標を含めるか含めないかは，担当教員の判断に委ねられている。

表１　達成目標として含める URGCC 学習教育目標について（科目領域別）

科目領域	原則として含める目標	含めることを推奨する目標	含めることができる目標
人文系科目	社会性	自律性，問題解決力	左記以外の目標
社会系科目	社会性	自律性，問題解決力	〃
自然系科目	問題解決力	自律性	〃
健康運動系科目	社会性	自律性	〃
総合科目	問題解決力	自律性，社会性	〃
琉大特色科目	地域・国際性	自律性，問題解決力	〃
情報関係科目	情報リテラシー 問題解決力	自律性 コミュニケーション・スキル	〃
外国語科目	地域・国際性 コミュニケーション・スキル	自律性 情報リテラシー	〃
先修科目	問題解決力	自律性，専門性	〃
転換科目	問題解決力	自律性，専門性	〃
日本語・日本事情	地域・国際性 コミュニケーション・スキル	自律性	〃

調査の概要は次節にて説明するが，本調査が行ったような数量的な把握を通して，一種の教育改革がどの程度大学に根付いたものであるかを定期的に観測しておくことは重要であると思われる。なぜならば，我々はそこで得られた調査結果を眺めることで，曖昧な議論をもとに改革を進めるのではなく，明確な根拠をもとに歩みを進めることができるようになるからである。今回の調査もその一環として捉えられるものである。

2．調査の概要

本調査は，平成24年度に共通教育等科目として開講された計1050クラスのシラバスを対象に，その達成目標欄にURGCC学習教育目標が正しく記載されているかどうかを確認するために行ったものである。その際の判定基準は，表2に示すように，「問題なし，誤表記，必須目標の脱落，未表記」の全4カテゴリで分類した。「誤表記」の主な判定例は，表3に示した通りである。これを見ると，点（・）や括弧の形（[ ]）といった，比較的軽微と考えられる点まで誤表記と判定しているが，これは今回の調査が初めて行われるものであったこともあり，できるだけ細かな情報を残しておくことを念頭に置いているためである。また，「誤表記」と「必須目標の脱落」が重複して生じている場合については，「必須目標の脱落」としてカウントしている。

なお，調査対象は全部で1050クラスのシラバスであったが，ウェブ上にシラバスが登録されていない科目が13件あったため，ここでは1037件を調査対象としている。

表2　シラバス判定の基準

判定の種類	判定内容
①問題なし	含めるべき学習教育目標が含まれており，表記も正しい状態。
②誤表記	含めるべきURGCC学習教育目標が含まれているが，表記に誤りが見られる状態。
③必須目標の脱落	含めるべきURGCC学習教育目標が含まれていない状態。
④未表記	URGCC学習教育目標の表記がない状態。

表3　誤表記の主な判定例

×	○
自立性	自律性
問題解決能力	問題解決力
コミュニケーションスキル	コミュニケーション・スキル
地域性・国際性	地域・国際性
（）【】＜＞〈〉「」｛｝	[ ]
文章に埋め込んでいる	箇条書きにした目標の末尾に付す

3．調査結果

それでは，調査結果について見ていこう。本節では，まずシラバスの記載状況について概観し，次にシラバスの設定状況を取り上げる。後者の観点は，シラバスに記載されたURGCC学習教育目標のうち，特にどの学習教育目標に重点が置かれているかを把握するためのもの

である。これらの分析を通じて，URGCC が本学の共通教育等科目においてどのような形で展開されているのかをひとまず確認することができるものと思われる。

3－1．シラバスの記載状況

（1）全体の判定結果

全体のシラバス判定結果を表４に示した。これを見ると，「問題なし」は３割強，「誤表記」は３割弱であった。また，「必須目標の脱落」は１割で，「未表記」は約３割に及んだ。

表４　シラバス判定結果（全体）

	問題なし	誤表記	必須目標の脱落	未表記	合計（度数）
全体	33.0%	27.7%	10.0%	29.3%	100%（1037）

（2）科目領域別の判定結果

科目領域別の結果について表５において確認すると，外国語科目（英語以外）で「問題なし」の割合が過半数に達しており他に比べ良好であった。また，外国語科目（英語）と転換科目においても「問題なし」の割合が相対的に高かった。反対に，社会系科目，琉大特色科目では「未表記」の割合が相対的に高く，特に琉大特色科目では，約６割にまで達している。なお，人文系科目，外国語科目（英語）では「必須目標の脱落」が他に比べて目立った。

表５　シラバス判定結果（科目領域別）

科目領域	問題なし	誤表記	必須目標の脱落	未表記	合計（度数）
人文系	9.6%	42.5%	17.8%	30.1%	100%（73）
社会系	15.5%	32.4%	11.3%	40.8%	100%（71）
自然系	27.3%	36.4%	2.3%	34.1%	100%（44）
健康運動	30.4%	34.8%	1.4%	33.3%	100%（69）
総合	9.6%	42.3%	11.5%	36.5%	100%（52）
琉大特色	7.7%	28.2%	5.1%	59.0%	100%（39）
情報	30.4%	39.3%	8.9%	21.4%	100%（56）
外国語（英語）	37.6%	21.0%	20.5%	21.0%	100%（210）
外国語（英語以外）	55.0%	10.1%	7.1%	27.7%	100%（238）
先修	31.9%	42.0%	1.7%	24.4%	100%（119）
転換	45.0%	20.0%	5.0%	30.0%	100%（20）
日本語・日本事情	19.6%	34.8%	10.9%	34.8%	100%（46）
全体	33.0%	27.7%	10.0%	29.3%	100%（1037）

（3）開講学期別の判定結果

つづいて，開講学期別にシラバス判定結果（表６）を見ると，「問題なし」の比率は前期から後期にかけて４割弱から３割弱に下がり，その分「未表記」の割合が２割強から３割強にまで上がっていることが確認される。

表６　シラバス判定結果（開講学期別）

開講学期	問題なし	誤表記	必須目標の脱落	未表記	合計（度数）
前期	37.1%	30.0%	9.9%	23.0%	100%（553）
後期	28.3%	25.0%	10.1%	36.6%	100%（484）
全体	33.0%	27.7%	10.0%	29.3%	100%（1037）

３－２．シラバスの設定状況

（１）各 URGCC 学習教育目標の設定率

それでは，本学が提供する共通教育等科目において７つの URGCC 学習教育目標がどのように分布しているのかを確認していこう。表７は，各 URGCC 学習教育目標について，その記載件数及び全シラバス数に占める割合，そして全目標設定件数に占める割合について示したものである。この分析結果を見ると，「自律性」と「コミュニケーション・スキル」は全シラバスの約半数において設定されており，また全目標設定件数に占める割合もそれぞれ約２割程度にまで及び，最も設定頻度の高い目標であることが分かる。それに次いで，「地域・国際性」，「問題解決力」，「情報リテラシー」が比較的多く設定されている。「社会性」と「専門性」は全シラバス数に占める割合は 20%強，全目標設定件数に占める割合が 10%弱で最も低い水準の数値を示した。

表７　URGCC 学習教育目標の設定状況

	記載件数	全シラバス数（1037件）に占める割合	全目標設定件数（2553件）に占める割合
自律性	507	48.3%	19.9%
社会性	253	24.4%	9.9%
地域・国際性	395	38.1%	15.5%
コミュニケーション・スキル	472	45.5%	18.5%
情報リテラシー	338	32.6%	13.2%
問題解決力	367	35.4%	14.4%
専門性	221	21.3%	8.7%

（２）URGCC 学習教育目標の平均設定数

次に，共通教育等科目シラバスにおける URGCC 学習教育目標の平均設定数について見てみよう。表８に示したように，全体の平均設定数は 2.46 個であった。また，目標設定数には，「原則として含める目標」が２項目設定されている科目領域（「情報科目」，「外国語科目」，「日本語・日本事情科目」）と１項目のみ設定されている科目領域（左記以外の科目領域）との区別があるが，前者にあたる「情報科目」と「外国語科目（英語）」において，平均設定数は３個（それぞれ 3.18 個，3.28 個）を超えていることが分かる。また，後者にあたる「琉大特色科目」において，平均設定数が最も低かった（1.18 個）。

表８　URGCC 学習教育目標の平均設定数（全体・科目領域別）

科目領域	平均設定数	度数
人文系	2.07	73
社会系	2.03	71
自然系	1.98	44
健康運動	1.87	69
総合	2.54	52
琉大特色	1.18	39
情報	3.18	56
外国語(英語)	3.28	210
外国語(英語以外)	2.40	238
先修	2.45	119
転換	1.65	20
日本語・日本事情	2.20	46
全体	2.46	1037

※網掛けの箇所は原則としてURGCC学習教育目標を2項目設定しなければならない科目領域。それ以外の科目領域は1項目でよい。

さらに，この目標設定数の分類（１項目指定／２項目指定）に応じて URGCC 学習教育目標の平均設定数を比較してみると，表９に示すように１項目指定の領域では 2.08 個となり，たとえ原則として１項目の目標さえ設定すればよいとされる場合であっても，実際は２個以上設定されていることが分かる。

表９　URGCC 学習教育目標の平均設定数（原則に応じた目標設定数による分類別）

原則として含める目標数の分類	平均設定数	度数
1項目指定	2.08	487
2項目指定	2.80	550

４．知見のまとめと今後の課題

ここまで，平成 24 年度の共通教育等科目のシラバス調査の結果について，URGCC 学習教育目標に関する記載状況と設定状況について概観してきた。

シラバス記載状況の判定結果については，全体としては「未表記」の割合が依然として 3 割に達しており，特に後期に開講されるクラスのシラバスにおいてはその割合が顕著に高いことが分かった。後期において状況が悪化する原因としては，単純に教員の記憶の問題が考えられる。本学では学期毎にシラバスの登録がなされる体制になっているため，後期に開講される科目のシラバス登録の時点では，教員はシラバス説明会[1]において明示した内容を忘れてしまっているということは想像に難くない。これらのことから，今後は開催時期についても考慮しながら，継続的に URGCC に対応したシラバス作成に関する周知を図っていく必要があるものと考えられる。

---

[1] URGCC に対応したシラバスの作成にあたり，大学教育センターではその周知のために共通教育等科目を担当する教員を対象としたシラバス説明会を行っている。平成 23 年度は，2 月中旬から下旬にかけて行った。

また，URGCC 学習教育目標の設定状況に関して，「自律性」と「コミュニケーション・スキル」が相対的に高い割合で設定されていること，中でも「原則として含める目標」としては設定されていない「自律性」が最も高い割合であったことは非常に興味深い結果である。このことは，共通教育等科目においては「自律性」，「コミュニケーション・スキル」が多くの場合，達成目標として採択されやすいということを意味していると同時に，また「自律性」に関しては改革運営側が「原則」として目標設定せずとも，教員が主体的にそれを設定しているという事態を意味している。これは，担当教員が主体的に何を志向しているのかを如実に示す結果であると言えよう。さらに，たとえ原則的には１項目の目標設定でよいとされる場合であっても，実際には２項目以上の目標が設定されることが多い，というこの事実についてもまた，上記と同様のことを指し示す結果であると言えよう。

今後は年次進行に伴い，URGCC 学習教育目標を設定する必要のある専門教育科目が増えていくことが見込まれている。それに伴い，URGCC の着実な展開に向けて，専門領域におけるシラバスを対象とした調査も行っていくことが必要となるであろう。

その際，本調査を単なる調査のための調査として捉えるのではなく，あくまで URGCC の実質化を目指すなかで重要な情報を得るための方法として積極的に捉えていくことが重要であろう。これらのデータを踏まえてこそ，有意義な改革を進めることができると考えられるからである。